

# おまげまな出合いをとおして

岩間 里香

四月、保育者としての生活が始まりました。初めて幼稚園にくる子どもや、進級してちょっと緊張している子どもたちと同じくらい、いえきつとそれ以上に緊張して、入園式を迎え、私にとってはまさに手さぐりの保育が始まりました。今思えば、自信はもろろもないものの、保育という感覚さえもよくわからなかったと思います。

私にとって当園は、初めて踏みこむ環境ではありませんでした。教育実習で保育をさせていただいたので、どのような保育をしているのかということは自分の中では、大まかに捉えていたのです。しかしながら、四月からは、担任ではなくフリーとして保育にかかわることになり、「フリーとはどのような存在なのか」というとても根本的なことを考えなが

らのスタートになりました。実際に保育をし、「こんなふうに言っているのかな」「この子はもっと違うものを求めているのかな」「今何を考えているのだろう」と、子どもの気持ちをわかっているのかどうかも不安で、自分がしていることにも自信がなく、保育者としての自分を作らなくてはと思っていました。それから十一カ月が過ぎた今日でも、毎日いろいろなことを考え、悩みながら保育をしているのは変わりません。しかしながら、保育者としての自分を作ろうというような堅い姿勢はないかもしれない。とても自然に保育をとるか、子どもとの生活を送れるようになったか、子どもとの

子どもたちと生活していると実にさまざまな出会いがあります。子どもにも、私にも先生方や同じクラスの人はもちろん、大きい組のお姉さんやお兄さん、人だけではなく、きれいなものや珍しいもの、落ち着く場所、さまざまなものと出会います。毎日、生活しているその時その時が、子どもにとって

も私にとっても出会いの場であり、発見の場です。日頃、大人同士の関わりの中で生活しているときには、なかなか感じる事ができない、子どもの持っている、実に新鮮で率直な感覚を感じられることは、私の感覚をも自然に表現できるようにしてくれました。四月当初、「保育者」としての経験がないことで変に意識して、気張ってしまっていたことは、むしろ自分をぎこちなく、動きづらくしていたのだと思います。このような構えを取り払ってくれたのも、子どもとの生活の中でさまざまな出会いや体験があったからです。

こんなことがありました。もうそろそろ三歳の人たちは帰る時間です。でも、お砂場には、ちょっと前から始めたお砂遊びをまだ楽しんでるA子がいいます。担任の先生も「そろそろ帰るわよ」と声をかけたので、お砂場で遊んでいた他の子どもたちは、なんとなく帰る雰囲気になり、片付けをしてお部屋に入ってしまった。お部屋では、お家に持って

帰ろうというのでしよう、今日作ったハートや、リボンのついたわりばしなどをビニール袋にいれてもらったり、すでにいすに座って待っている人もいます。『うーん、A子ちゃんもそろそろお部屋にはいらなくなっちゃ』と思いつつ、「A子ちゃん、そろそろ帰るんだけど……」しかし、A子は何も聞こえないかのように、ひたすらカップに砂を入れていきます。「A子ちゃん、何作ってるの?」「プリン」「そっか、じゃあそれができたらおしまいにする?」「やだー」「うーん、みんなね、お部屋で帰る支度してA子ちゃんくるの待ってるよ」「いいの?」「また明日遊ぼうよ」「やだー」。A子の気持ちに出来るだけ添うようにしようと思いつつ何かを言っても、A子はなかなかその気になりませんでした。『あー、どうしよう、担任の先生が最後に来てくれるかしら?』そんなことを思いつつながら（願ひながら）、「じゃ私、先にお部屋にいつて待ってるね」と言い残し、A子ちゃんは帰る気分にはならなかった

と自分の無力さを感じながら、部屋に戻り、座っている子どもたちのそばに腰を下ろしました。ふと外を見ると、A子が靴をはきかえている姿が目に入りました。一本取られた気分でした。『なあんだ、わかってるんじゃない?』A子は自分が帰らなければならぬことも、もうその時が来ていることもわかっていて、一所懸命になっている私に抵抗していたのだと思いました。

このように、自分の思考に捉われて空回りしてしまふことは、子どもとの関わりの中で何度も経験しました。私が関わりなかつた方が、子どもたちの流れの中では、むしろ自然だったのではと思うこともあります。子どもたち自身で彼らなりに解決できることだってたくさんあることがわかりました。三歳児と違っていても、実はよく考えることが出来たりして、それが行動に伴わないこと



が多いのでわからなかったのですが、ちょっとした会話や、いざこざに対処している姿に、『えっ、こんなこともできちゃうの』と大人の部分を垣間見てびっくりしてしまうことがよくありました。私の中で子どものイメージは以前に比べ、大人に近くなりました。この変化もさまざまな出会いの体験から生まれたものです。

このように自分が誰かとまたは何かと出会い感じたり、発見したりすることは素敵なことです。そしてまた、子どもがある出会いをしている時に出会えることも、また素敵です。まだまだ保育の経験が浅い私には、他の先生方が子どもと接しているところを見られることは、とても興味深く、発見でもあります。子どもとの関わりは二つと同じことなどないのに、先生と向かい合う子どもたちの、満足している笑顔を見ると、私もあのような時にはこう接してみようかな、とたくさんのヒントを得ることができたりします（結局同じようにしてもうまくいかない

ことのほうが多かったです……）。

毎日子どもたちは、素敵な出会いをたくさんしています。ある女の子がお姉さんたちがはいているドレスを見て「うぁー、きれー」と目を大きく開いて言いました。こんなにすてきなドレス初めて見たというようなうれしさです。そしてこの上ないような喜びの顔で私の方を見ました。その表情は、どんな不幸な人でも、その一時を幸せに出来るのではないかと思ってしまうほど素敵です。五歳の男の子（Bくん）は、自分でつくったお面を三歳の男の子（Cくん）に「あれほしーい」といわれ、一瞬困った様子になりました。ちょっとうれしそうな顔をして「作ってあげようか？」と言うと、Cくんは無言でうなづきました。十分ぐらいかかったでしょうか、お面を作っているBくんとその横にじっと座って待っているCくんの間に会話はありません。「はいっ」、出来上がったお面をもらって、緊張した顔で、何も言わずに、Cくんは自分のお部屋に走って

いきました。そばにいた私は「Cくん、すぐうれしかったみたいね」というと「ぼく、作ってあげたんだ」と誇らしげに教えてくれました。Bくんにとっても、大変うれしいこと出会いだっと思いません。一方、Cくんも自分のお部屋では「作ってもらった」とうれしそう。そのお面をととても大切にしています。

言葉のない出会いもたくさんあります。三歳のDちゃんはお店やさんで、手作りのネックレスを手に入れました。それを手に持ったまま、何も言わずに私の方をみて、ちょこっと両肩を上げてみました。私も同じようににこっと笑って、肩を上げました。D子はネックレスを握りしめ、自分のお部屋に走っていきました。その素直な表現に、私も感覚で応える、それだけで十分なことも保育の場にはたくさんあるということ、これも、子どもの純粋で率直な感覚とたくさん出会えたことで発見したことです。

まだ一年足らずの保育の経験しかありませんが、その難しさ、奥深さを日頃感じているのは事実です。子どもと共に生活することは、保育者という大人と子どもとはいえ、人と人との関係です。感情の伴った、流動的な難しい関係だと思えます。このような環境では、楽観的かもしれませんが、もっと楽なというか、自然というか、大人げないというか、そんな自分を忘れずにいないと、自分が大変になってしまう時があるのかなとも感じました。

保育のなかで、先生方や、子どもとさまざまな出会いをとおして、人として、人と関わりながら生きることの楽しさを、たくさん教えていただきました。

(お茶の水女子大学)